一歩先に進んでいる子供たち

函館市医師会 江端整形外科医院

江端 済

2020年2月28日に北海道独自の緊急事態宣言が出てから、我が家の子供たちの状況は一変してしまった。当時中学校2年生の息子は修学旅行中で、帰函した28日は市内の学校はすでに休校に入っていた。函館市内は不要不急の外出は控えるようにと言われたその週末、窓の外を眺めると人や車が全く見えず恐ろしいほどの静寂だった。

当時小学校3年生の娘は、朝寝坊ができるとのんびりしていたが、息子は楽しかった修学旅行の思い出に浸る間もなく家から一歩も出られない自粛生活に入ったのだから、ストレスでイライラする日々。

私は日々の診療への不安、コロナ対策、マスクや 消毒薬の確保、もし自分のクリニックからコロナ患 者が出たら、もし自分や家族が罹ったら、等いろい ろな不安と恐怖からピリピリとしていた。

休校期間中、外出ができない子供たちはゲームに 多くの時間を費やしていた。今のゲーム機はとても 進化していて、通信機能を使うと離れている友達や 親戚とも同じゲームをおしゃべりしながら一緒にプ レイすることができるのだ。子供たちは周りに声が 聞こえるとうるさいから、という理由でマイク機能 付きのイヤホンを使用しながらゲームをしているの だが、その様子は「一人で楽しそうにおしゃべりを しながらゲームをしている不思議な子」に見える。 そんな姿が私にはとても不思議で、慣れるまでにい ささか時間を要した。普段ならゲームは一日〇〇分 まで!などと口うるさく言い、長時間ゲームをする ことに嫌悪感を抱いていたが、休校期間中はこのゲ ーム機のおかげで、誰にも会えない寂しさや不安、 孤独を感じることなく過ごせたのであるから大変あ りがたく思えた。

前の学年の終わりがいつなのか分からないまま、子供たちは進級していた。4月中旬に学校が再開し、とても楽しみにして行ったが、その学校生活は今までのものとは全く違い、友達との机の距離をあけ、隣同士でおしゃべりすることも、歌を歌うことも、全て禁止された。小学生の娘は楽しみにしていた運動会に学芸会、遠足や宿泊研修の中止が決まった。中学生の息子も最終学年として取り組むべっった。中学生の息子も最終学年として取り組むべってた。中学生の息子も最終学年として取り組むべっていた息子は休校開始から部活動が休止になり、このまま部活もできないまま終わってしまうのかと諦めていた。6月に入り、制限付きではあるものの部活動が再開し、少しずついろいろなことができるように

なってきて、他校との練習試合も行われ始めた。しかし、一番の楽しみである中体連の中止が覆されることはなかった。

そんな中、8月初めに中体連に代わる試合が行われることになり、それが中学生最後の大会に決まった。中学球児最後の夏。しかしコロナ禍においてはたくさんの制限が設けられた。円陣を組むことも、相手チームと向かい合い整列し挨拶することも、ナイスプレーにハイタッチすることも、声を出して声援することも全て禁止された。

いつもの中体連であれば、選手の名前を呼ぶアナ ウンスがあり、電光掲示板に名前が映し出され、同 級生らの声援に応える。子供たちの応援合戦に熱が 入り、さらに上をいくように保護者らの応援にも力 が入る。3年生として最後の夏、それらを経験する ことができない息子をとても可哀想だと思ってい た。しかしいつもとは違う大会であっても、泥まみ れになりながら一生懸命プレーをし、ナイスプレー には「ハイタッチ」ならぬ「肘タッチ」をし、勝利 をつかんだ時には「やったー!!」と大騒ぎをして は、あっ!と手で口を覆う。そんな試合が何試合か 行われ、やがて息子の夏は終わった。涙を流しなが ら仲間たちと健闘をたたえあい、残された後輩たち には先輩としてのアドバイスを送り、グラウンドに 一礼して帰路に着いた。帰りの車の中で「後悔はな い、やり切った」とすっきりとした顔で言った。

あんなことも、こんなこともさせてあげたかった、 と可哀想に思っていたが、実は親である私の方がい つまでも現実を受け入れることができず、前を向け ていなかったんだと思い知らされた。

短い夏休みも終わり、野球部を引退して帰宅が早くなった息子に「部活が無くてさみしくないか?」と心配の気持ちを込めて聞くと「今まで一緒に帰れなかった友達とおしゃべりしながら帰れる時間も楽しいよ!」と、これまたさらりと返してきた。やはり、ここでも子供は一歩先に進んでいた。

早く「あの時は大変だったよねー」と、言える日が来ることを願って、私も一歩ずつ進んでいこうと思う。

